

2022年度

S 5

小 論 文

2月25日(金)

情 報 学 部 (情報社会学科)

9 : 30 ~ 11 : 30

【前期日程】

注 意 事 項

試験開始前

- 1 監督者の指示があるまで、問題冊子、解答用紙、下書き用紙に手を触れてはいけません。
- 2 監督者の指示に従って、全部の解答用紙(3枚)に受験番号を記入しなさい。

試験開始後

- 3 この問題冊子は、7ページあります。はじめに、問題冊子、解答用紙、下書き用紙を確かめ、枚数の不足や、印刷の不鮮明なもの、ページの落丁・乱丁があった場合は、手をあげて監督者に申し出なさい。
- 4 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。(下書き用紙と間違わないよう十分注意してください。下書き用紙は採点対象となりません。)
- 5 文字数制限のある解答用紙の記入については、下記の点に留意すること。

- ・書き出し・改行後は、一マスあけない。
- ・句読点なども1文字と数える。
- ・英数字は一マスに2文字入れてよい。

- 6 問題は、声を出して読むではいけません。
- 7 配点は、比率(%)で表示してあります。

試験終了後

- 8 問題冊子と下書き用紙は、必ず持ち帰りなさい。

1

1990年代のバブル経済崩壊後、多くの温泉観光地は急速に衰退していった。そうしたなか、熱海市は2007年に熱海市観光戦略会議を設置し、長期的な観光基本計画を策定することから再スタートし、図表1に示すような取り組みをしてきた。

図表2は熱海市における宿泊客数の推移、図表3は観光客の年代別構成比の推移である。図表4は熱海市におけるロケ誘致実績数の推移である。図表5はGoogleトレンドによる「熱海温泉」などの温泉地の検索数に関するデータである。図表6は熱海市のデータではないがスマートフォンの利用と旅行消費に関するデータである。

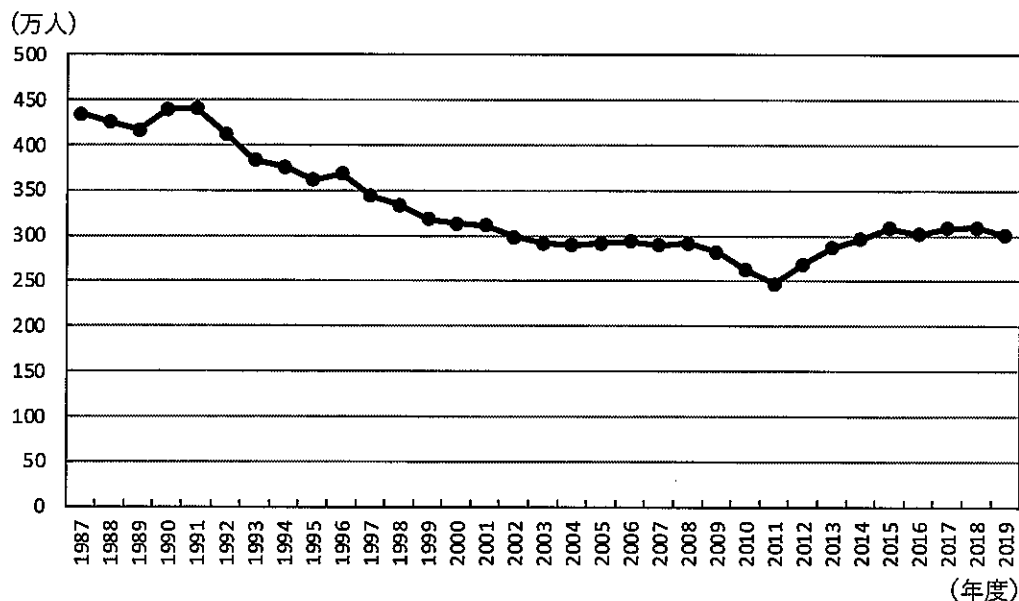
これらの図表に基づいて、熱海市における観光がどのように回復していったか、熱海市での取り組みとその効果について観光動向を読み取りなさい。また、この回復において、様々なメディアがどのように関わってきたかを推測し、なぜそう考えたのかを論理的に説明しなさい。(600字以内)

(配点 40%)

<p>公的主体</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・熱海市財政危機宣言による危機意識の共有 [2006年] ・熱海市観光戦略会議の設立 [2007年] ・観光施設周辺の都市計画道路の無電柱化、民間の資金協力を受けてつ遊歩道を整備 ・観光基本計画・実施計画(アクションプログラム)の策定 [2007年] ・観光プロモーション事業の公募(「意外と熱海」プロジェクト推進) ・プロモーションの実施(プロモーションツール作成、情報番組・バラエティ番組等の誘致など) [2012年]
<p>民間事業者</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・旅行スタイルのニーズに合わせた宿泊施設のリニューアル <ul style="list-style-type: none"> — 宿泊事業者による個人利用向けに対応したリニューアル — 所有者変更による全面リニューアル — 保養所からの転換 ・Uターン者(NPO法人 atamista)による熱海の魅力的なコンテンツづくり <ul style="list-style-type: none"> — 熱海の街・農業・海・緑・歴史・健康などの資源を生かし、住民・別荘所有者・観光客のための体験交流型イベント事業(「オンたま」事業[2009年])の提供 — 株式会社 machimori(NPO法人 atamista から派生) [2011年]が、熱海を中心商店街の空き店舗をリニューアルし、カフェ、ゲストハウス等を運営 等

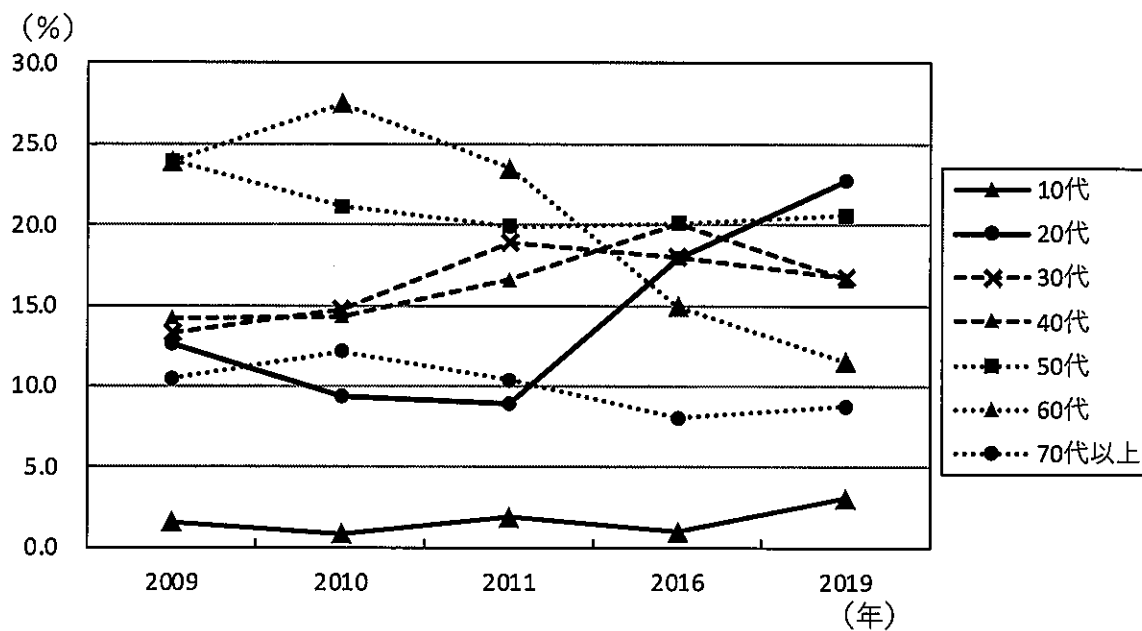
図表1 熱海の再生に向けた主な取り組み

(出典) 国土交通省「観光白書」(2017年度)



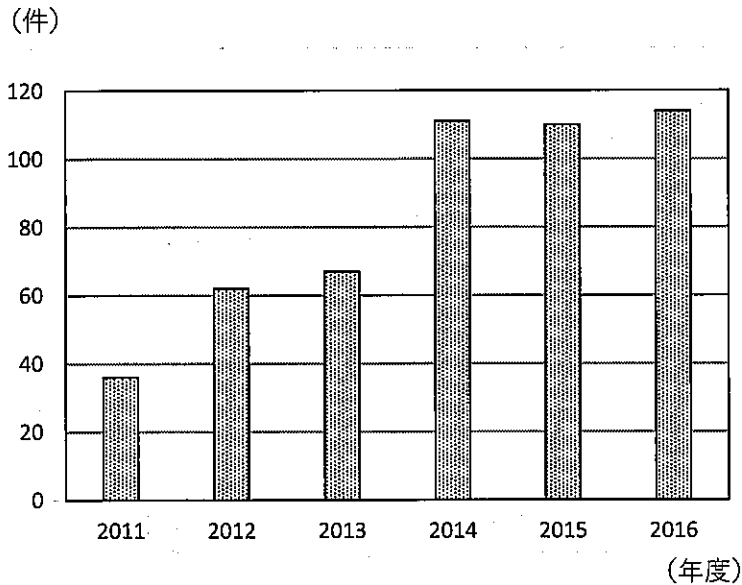
図表2 熱海市における宿泊客数の推移

(出典) 熱海市観光建設部観光経済課『令和2年版 熱海市の観光』(2021年3月), 熱海市観光経済部観光課『平成21年版 熱海市の観光』(2010年1月)



図表3 熱海市観光客の年代別構成比の推移

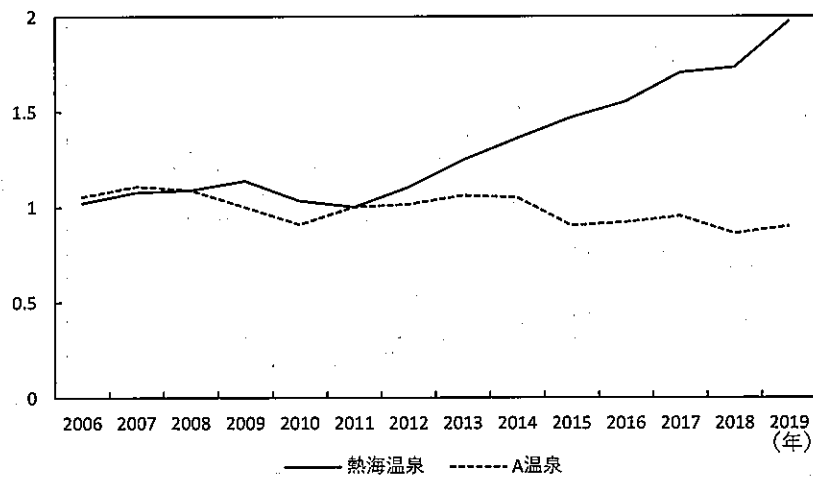
(出典) 熱海市「熱海市観光客動線調査」(2009年, 2010年, 2011年), 熱海市「熱海市観光動線実態調査」(2016年), 熱海市「熱海市観光客実態調査」(2019年)



図表4 熱海市のロケ誘致(情報番組・バラエティ番組等の誘致)の実績数の推移

(注) 2011年度の実績数は、山田久貴・大木しのぶ「熱海のブランド戦略」『Schoo』2016年2月10日公開のスライド資料を参照

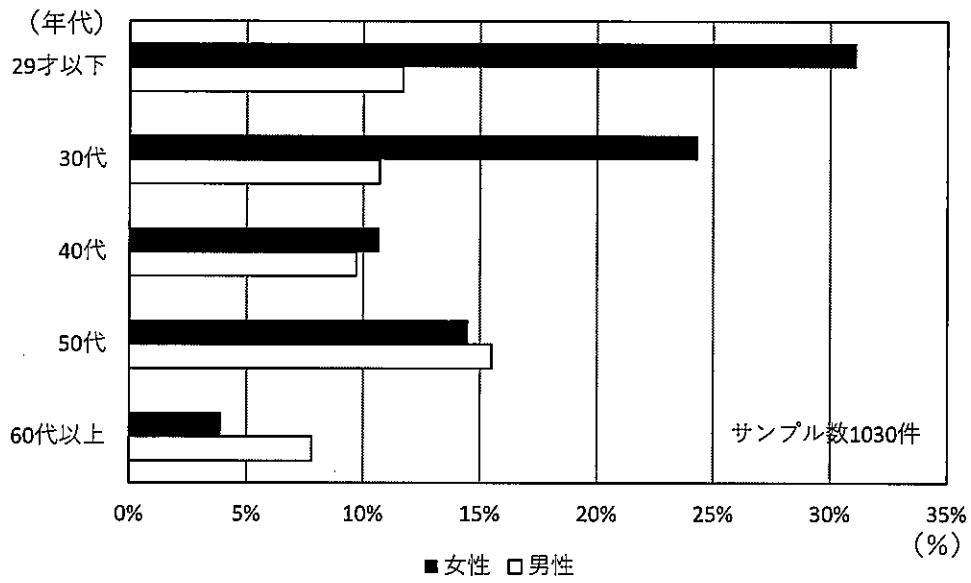
(出典) 熱海市観光建設部観光経済課「観光戦略会議資料」(2018年7月)



図表5 Googleトレンドによる「熱海温泉」などの温泉地の検索数の推移

(注) ・2011年の値を1として正規化(2011年の値で各年の値を割る)を行った。
 ・Googleトレンドとは、ある単語がGoogleでどれだけ検索されているかというトレンドをグラフで見ることができるツールである。

(出典) Googleトレンド



図表6 「SNSの投稿で行ってみたいと思った場所に行った」人の調査[年代別・性別]
 (出典) 株式会社JT総合研究所「スマートフォンの利用と旅行消費に関する調査」(2015年)

次の文章は『何のための教養か』(桑子敏雄著, 筑摩書房, 2019年)の一部です。よく読んであとの問いに答えなさい。なお, 問題作成のために文章を一部改変しました。

(配点 60%)

アリストテレスは、人間を「社会的な動物」ととらえた。フロネーシスは、行為にかかわる思慮深さである。アリストテレスは、これを倫理的能力としている。人間は、個では生きることができず、社会的な存在として生を全うしなければならないからである。フロネーシスは、社会生活を営む知的能力でもあり、国家を運営するための政治的能力でもあった。したがって、行為を選択する存在が人間であるならば、誰もが思慮深さとしての「フロネーシス」をもっている。しかし、人間が社会的な動物であるという点を考慮するならば、高度なフロネーシスは個々の行為の最適性を認識するとともに、行為の構造や行為の目的と手段、行為をめぐるさまざまな課題、社会的な動物としての人間の本質について考察するであろう。人間の個人の性向としての人柄や集団としての社会構造、政治システムなど、こうした領域にあるのは、純粋で厳密な認識ではなく、すぐれた行為を行い、よりよい社会を実現するための選択である。そのための知的な営みは、自然についての真理を与える理論ではなく、よりよい選択のための営みであるから、アリストテレスは、これについて過度の厳密さをもとめるべきではないと語っている。

すぐれた科学者のもつ知的能力とすぐれた政治家のもつ知的能力は異なる。アリストテレスのことでいえば、前者はソフィアであり、後者がフロネーシスである。現代社会では、ソフィアをもつ人とフロネーシスをもつ人とは別である。前者が理系の知識であり、後者が人文社会系の知識であるならば、理工系教育と人文社会系教育とは別々に行われているので、すぐれた科学者であっても「思慮深い人」であるとはかぎらない。現代の教育システムは、これを容認している。

が、アリストテレスは、ソフィアとフロネーシスは、どちらも一人の人間がそなえるべき知的能力と考えている。重要な点は、二つの能力は独立の能力だということである。ソフィアがそなわっていてもフロネーシスがそなわるとはかぎらず、フロネーシスがそなわっていてもソフィアがそなわっているととはかぎらないのである。さまざまな行為の選択や社会生活の経験がフロネーシスの獲得には不可欠である。

(中略)

社会との境界で不調和を生み出すに至った近代科学は、ソフィアの歴史的展開のうちに、強固な力をもつにいたったシステムである。アリストテレスはソフィアを純粋な個人の知的活動、それ自体として求められる活動であると考えたが、近代西洋科学は複雑かつ巨大な技術と融合した。この科学技術は、個人のもつ能力というよりも、巨大なシステムとして、わたしたちの世界を劇的に改変する力をもった。フランシス・ベーコンのいうように、知が力をもったのである。この力は、たんに世界の

真理を認識するだけの力ではなく、知の対象を変化させ、また、わたしたちの生きる環境をも過激に改変する技術とセットになっていた。この科学技術を技術(テクネー)とソフィアの融合ということで、「近代テクノソフィア」と呼ぶことにしよう。

(中略)

科学技術と社会の不調和という事態の認識は、ますますその重要度を高めているが、二十一世紀に入り、課題の広がりや深さは計り知れないものへと変化しつつある。とくに、情報技術がより巨大な影響力をもつに至ったことは重大な変化で、インターネットの発達によって形成された、人間のいわば外部記憶装置としてのグローバルなネットワークは、個人という単位をはるかに超越して、巨大な知的装置として機能するに至っている。

わたしたちはインターネットによって、自分の脳のなかに蓄積されていない知識や情報に手元のスマートフォンから直接アクセスできるようになった。いわば、巨大な百科事典や辞典を操作できるようになったのである。意味の分からないことばや、学んだことのない出来事などについても、検索すれば、簡単に情報に接することができる。音声入力によっても操作できるようになり、あたかもスマートフォンが一個の人格であるかのような錯覚に陥ってしまう。

インターネットに入力した情報は、その巨大なネットワークのどこかに蓄積されている。一般的、普遍的な情報も個人データもこのネットワークのどこかにある。

さらに、SNSでは、「書く」という行為も大きくその意味を変えることになった。たとえば、わたしはこの本を書いているが、書き手は自分の考えを文字で表し、それをインクと紙という物質・物体に具体化する。印刷する人たち、出版する人たち、販売する人たちの手を経て、購入した人が読んだとき初めて、コミュニケーションが成立する。ただ、このコミュニケーションは一方向である。読み手が書き手にメッセージを伝えるとすれば、本に挟まれた読者カードがあるとき、そのカードを読み手が出版社に送ったときである。どのくらいの読者に書き手の考えが届いたかは、販売された部数によるが、それはあくまで売れた本の数であり、読まれた本の数ではない。

他方、SNSでは、情報の発信は、読み手が閲覧し、「いいね」を返せば、そのメッセージは書き手のもとに戻る。メールで感想を送り返すのも簡単である。情報の受け手は、即座に情報の発信者となって、双方向の情報交換が可能になる。それだけではない。受け手はたちどころに情報を多数の他者へ発信する主体に変化する。情報は簡単に拡散してゆく。

双方向のコミュニケーションから拡散する情報へと展開する現代の情報環境は、さまざまな観点から「便利」であるが、こうした情報技術には、その裏側にリスクも潜んでいる。その例をいえば、個人へのメールやSNSによる悪意ある書き込みである。あるいは、悪意なく書き込んだものでも、受け取り手によっては悪意を感じてしまうこともある。ネット上の書きことばは、書き手の意図ではなく、読み手の受け取り方によるコミュニケーションである。悪意ある表現、あるいは悪意と受け取れる表現も簡単にやりとりすることができる。受け取った情報は、容易に拡散してゆく。ネット空間は、思いも寄らない膨大なリスク空間であることをわたしたち一人ひとりが認識しておかなくてはならない。

こうした巨大ネットワークがAIやロボット技術と連動して自律的に機能するようになると、アリストテレスが区分したソフィアとフロネーシスの境界領域に踏み込んでくるようにも見える。人工知能が自律的に判断し、選択することができるようになると、これはこれで一種のフロネーシスのようにも見えるからである。この人工擬似フロネーシスは、グローバルなネットワークのなかで自律的な行為選択の機能をもつことになると、人間の選択にかかわるフロネーシスを簡単に超えてしまうであろう。この人工擬似フロネーシスを備えた近代テクノソフィアをメガテクノソフィアと呼ぶならば、この知は、巨大ソフィアと融合して、人類の生活環境そのものを選択することも考えられる。しかし、このメガテクノソフィアは、生身の人間ではなく、その環境は生身の人間の生きる環境でもない。いずれにせよ、そのようなメガテクノソフィアという知能、知性が近い将来に出現することは十分予想することができる。^①

たしかに、このソフィアに選択の能力を与えるかどうかは、人類の選択であるが、人類全体がこの問題について合意を形成することは難しい。だれかが、すなわち、科学者が政治家か起業家かがこの選択をしてしまえば、人類は、このメガテクノソフィアの支配下に置かれる可能性が出てくるであろう。

要するに、自律的メガテクノソフィアが人類にとって最善の選択をするかどうかは、そこにどのような価値のプログラムが書き込まれているかによる。このプログラムをデザインし、また実現のために何を選択するかを決めるのは、近代テクノソフィアではなく、現代にふさわしい人間のフロネーシスでなければならない。それは人類のもっとも重大な選択にかかわる能力である。ソフィアだけをもつ者にこの選択を任せるわけにはいかない。^②

問 1 下線部①「メガテクノソフィアという知能、知性」とはどういうことか。アリストテレスの考えと対比しながら著者の考えを説明しなさい。(250字以内)

問 2 下線部②「それは人類のもっとも重大な選択にかかわる能力である。ソフィアだけをもつ者にこの選択を任せるわけにはいかない」という著者の主張を要約した上で、それについて、あなたの考えを具体的に述べなさい。(400字以内)